

激動の中の青春

埼玉県 田山 実

一 建国大学入学までのこと

私は、昭和十九（一九四四）年四月に新設された横浜工業経営専門学校（前身は横浜高等商業学校）の第一回生として入学しました。その新設校の校長である岡野鑑記先生は元建国大学の教授で、陸軍の石原莞爾中将が主宰する東亜連盟の熱心な支持者でもあって、石原莞爾の書き表した「世界最終戦論」を倫理の時間に講義をしていました。

そんな岡野先生の影響もあって、私は新興国家満州国に魅力を感じるようになりました。そんなことから、建国大学の学生募集広告を取り寄せて見ました。募集の要旨には、次のように書かれてありました。

「建国大学は、満州帝国の最高学府であり、帝国を構成する各民族の青年中より俊秀を選抜して入学させ

る。

学生は、塾に緒民族一緒に起居を共にし、民族協和を模範的に実践し、道義世界の建設に邁進する指導者を養成する。

そして本学の学生は、その使命の重大性に鑑み、在学中必要なる費用は国家より支給する。卒業直後、高等官試験に任官し、国家経営の指導者として国運の興隆に尽くすものとする」という内容でした。

大川周明の「大アジア主義」の主張などに共感していた私は、すぐに建国大学を受験することに決心をして、入学したばかりの横浜工業経営専門学校を退学して、十月に行われる入学試験に備えました。その結果、幸いにも合格することができました。

昭和十九年には、戦時体制強化のため、中等学校は四年で卒業ということになったので、五年生と四年生が同時に受験しました。

五年卒業生が七期生に、四年卒業生が八期生となり、併せて百五十数人が昭和二十年二月下旬に建大入学のため全国から下関に集合しました。そして、アメリカ

の潜水艦が出没する中を、日本海軍の駆逐艦に護衛された閔釜連絡船で下関港から朝鮮の釜山に上陸、そこから列車に乗り新京（長春市）に向かいました。

二 ソ連軍の侵攻

昭和二十年八月十五日の終戦の日を、私は新京の郊外にあった新京飛行場の飛行場防衛の重機関銃陣地で迎えました。当時の日本人にとっては、この敗戦の日には生涯において忘れることのできない、最も衝撃な日であったことと思います。そして、外地にあった多くの日本人の生死を分けた日でもありました。

私もまた、あと一週間も終戦が遅れていたら、今生きてこの文章を書くこともできなかったものと思います。

八月九日、突如としてソ連軍が兵力百五十万人、戦車五千台、飛行機三千五百機、火炮二万六千門の圧倒的な戦力で、満ソ国境の三方面から怒涛のごとき勢いで侵攻して来ました。

それまで平穏を保っていた満州国全土は、このときから一挙に戦場となってしまう、関東軍により日本男

子十八歳以上に対しての「根こそぎ動員」が行われたのです。この召集令で、建大前期二年生だった私も十八歳になっていたので、学友と共に八月十二日にそれぞれ遺書を学校に書き残して、隊伍を組み木銃を肩に大学を後にしました。

新京駅に通ずる大同大街を進んで行くと、召集を受けた市民の人たちも、次々と木銃を肩に私たちの隊列に加わってきました。緊迫した空気の中で、家族たちも不安な面持ちで見送っていました。そんな情景の中で、乳飲み子を抱き抱えた若い女性が涙を流しながらついてきました。主人と思われる男性が、何度となく帰るように言っても離れようとしません。男性は「帰るんだ！」と言って、平手打ちを喰らわせました。遂に女性も立ち止まり、泣きながら遠ざかって行く我々を見送っていました。そのときの私は「大和撫子にあるまじき、なんと女々しい女性であるか」と軽侮の念を抱きましたが、戦後、自分も子供を持つ身になって、そのときの光景を哀切の思いを持って思い起こすようになりました。

指定されていた集結地では、前線から後退して来た、疲れ切った兵士たちも入り交じって混乱状態でしたが、待機しているうちに次々と所属部隊が決まり、学友たちもそれぞれに別れることになりました。一人また一人とお互いに名前を呼び合って、頑張るよう声を掛け合いながら去って行きました。

私は、夜も遅く雨が降り出す中を、やっと官庁街の一角にある司法部（日本の司法省）のビルに入ることができました。そのビルも、廊下には兵士たちが疲れた身体を壁にもたれて座っていて、足の踏み場もない状態で、足もとに気をつけながら進まなければなりませんでした。

それから、私たち緊急召集を受けた者たちは地下の一室に集められ、気鋭の青年将校から次のような訓辞を受けました。「諸君の命は明日の午後四時までと申すべく。現在の敵の侵攻速度からすると、明日午後四時ごろには、ソ連重戦車部隊が我々の前面に現れることになる。そのとき、諸君は爆雷を抱えて、敵戦車の下に飛び込み頓挫させ、その侵攻を食い止めてもら

いたい」とのことでした。私たちは、その話を肅然として聞き入りました。私はそのときの異様な静けさを、今でも思い起こすことができます。

翌日は、未明より分隊毎に分かれ街路樹を切り倒してバリケードを作ったり、爆雷も小銃も支給されていない状況の中で、敵戦車に爆雷を抱えて飛び込む模擬訓練をくり返しました。それから重戦車の後から進出してくるソ連兵を邀撃するため、一人ずつ入る蛸壺と称する穴を掘ることになりました。入口の門の所から玄関まで、分隊長の指示により位置が決められましたが、作業を始める前に分隊長の軍曹から次のように言われました。「俺はお前たち全員が見渡せる後方の要の位置にいる。敵兵を前に逃げ出す奴がいたら、俺が射殺する」と言って、拳銃を上差し上げました。それから私たちは、黙々と自分の墓穴になるかもしれない蛸壺と称する穴を掘りました。死を覚悟した私たちには、こよなく寂しい思いがこみ上げてきました。小休止の時間に、隣の穴を掘っていた四十歳前後の人が私に話しかけてきて「君たち学生たちは一人だからい

いよ、俺たちは妻子のことを考えると死んでも死に切れない」と言っていました。私もどうせ死ぬなら、建国大学で十七歳のため残った同級生たちと死にたいものだと思いましたが、この戦友ともなる人たちが、敵陣に倒れていくのを見れば、私も間違いなく突撃して行くだろうと思いました。

しかしお昼近くになっても、爆雷どころか小銃もない状況でした。

午後になって間もなく、味方の部隊の奮戦によって、敵の進出が大分遅れることになったと知らせがあり、小銃や弾薬もやっと行き渡るようになり、これでとりあえず命が助かったと私たちは思いました。

しかし、戦後明らかになったソ連側の記録によると、このとき我々が死闘を行うはずであった敵戦車部隊の遅延は、十二日夜に北満一帯に降ったすさまじい豪雨で進行速度が大幅に低下したのと、燃料補給のトラックが泥濘と化した道路に車輪をとられ、戦車への燃料の補給ができなくなったとのことで、今にして思えば、この豪雨によって私たちは命拾いをしたと言えるわけ

です。

翌十四日、私は重機分隊に編入され、さらに前線である新京飛行場の前面に展開すべく、移動を開始しました。

翌十五日には、早朝から飛行場前面で、敵戦車が侵攻して来るであろう道路が見渡せる場所に、重機関銃陣地を構築し、また爆雷攻撃を行う準備も整えました。そこは、周囲に低い樹木がある開けた場所ですが、我々の声だけが響く、物音一つしない静寂に包まれていました。私たちはその陣地で、ひたすら敵の進出して来るのを待ち構えていました。この日は雲一つない晴天で、真夏の太陽が照りつけていましたが、昼近くになり私と同僚の二人で昼食を取りに部隊本部に行くように命じられました。

本部に近づいて行くと静まり返っており、兵士の何人かが声を発することもなく、空を仰いで立っています。その一人に尋ねると、「日本は敗けたんだ」という答えが返ってきました。そして、日本からの玉音放送で戦争が終わったことが知らされたとのことで、最初

は驚きましたが、次に私の心に湧きおこってきた偽らざる思いは、「これで命が助かった」ということでした。翌々日になると、私たちの部隊は市内の集結地に向け移動を開始しました。市内に入ると数日前、前戦に向かうときには感じられなかった、街路樹の緑の美しさや道を行く女学生のセーラー服の姿に、胸の中の氷が溶けていくような思いにとらわれました。

集結地に到着すると、小銃や弾薬は一カ所に集めるよう指示され、部隊長による訓示が行われるのを待ちました。しばらくして大佐の肩章を付けた初老の部隊長が一段高い台の上に立ち、話が聞こえるように周囲に集まるように指示されました。そして、部隊長からは次のような訓示が行われました。「本日ここに諸君の部隊を解散する。諸君は急遽召集された市民で、正規の兵士とは違うので、それぞれの家庭に帰ってもらう。これからの日本は、有史以来初めて経験する敗戦国という立場に立たされる。その困難さは、我々が想像する以上の厳しさがあるものと思われる。諸君はこの困難に立ち向かい、全力を挙げて日本の再建に努力

してもらいたい。諸君の健闘を祈る」この部隊長の切々とした語調で話された言葉は、私の胸に深く刻み込まれました。

それぞれ同僚とは別れのあいさつを交わして家路につくことになりましたが、私は全寮制ですべての生活の場であつた建国大学に向かつて歩き始めました。

三 終戦後の新京で

満州国の最高学府として、日・漢・滿・蒙・鮮・白系ロシアの若者たちが起居を共にし、共に学ぶ民族協和を實踐する大学として期待を寄せられていた建国大学も、満州国の崩壊とともに消滅することになりました。それで私が帰学した十八日には、残務整理にあたる先生方が残っているだけでした。他民族の学生はそれぞれの出身地に帰り、日系学生は日本への帰国が実現するまで、各教授が責任を持って面倒をみるということになりました。(十九歳以上の日系学生は、既に關東軍に召集されている) 建国大学では、学生が日常生活をする場所を塾と呼び、大学の後期(本科)になるま

での前期の三年間は、一学年を一から六までの塾に分け、各民族一緒になって起居を共にしていました。私は一塾に所属していましたが、同塾の三枝君と二人で、塾頭であった中村三郎先生のお宅に行くことになりました。

ところが中村先生はすでに召集されており、奥様はソ連軍の侵攻後間もなく、五人の子供を連れて朝鮮に南下していて、だれもいない留守宅でした。学校からは生活費として一人五百円が支給され、米・みそ・しょうゆ・野菜などは、できるだけ早く学校に取りに来るように言われました。それで二十日の朝であったか、貸してもらった荷車を三枝君と二人で引いて、学校に向かいました。

校門を入り食糧倉庫の近くまで行くと、一年上級の伊藤肇さんが、拳銃を持って立っていて、「走ソウ吧バ（行け）！」と大声で叫んでいます。その視線の方向を見ると、大きな空の袋を肩にかけた満人（当時の満州では漢・満諸族を総称してこう呼んでいた）が、四、五

人、百メートルぐらい先でこちらの様子をうかがっていました。動こうとしない彼らを見て、伊藤さんは銃口を空に向け一発発射しました。銃声を聞いて彼らも後退しましたが、逃げようとはしません。それで伊藤さんは私たちに向かい、「早く必要なものをできるだけ積んで行け、満人の略奪だけでなく、間もなくソ連軍が接収しにやってくる」と声をかけてきました。私たちも事態が切迫しているのを知り、急いで食糧品を荷車いっぱい積み、校門を出ました。建大の前は、台地である南領に向かってゆるやかに登っていく広い道路が続いています。その中ほどまで行くと、初めて見るソ連軍の重戦車が、こちらに向かって来るのにぶつかりました。道路の片側に寄って、通過していくのを見ましたが、長い砲身の戦車砲を積んだ戦車の大きさに驚かされました。記録によると重さ四十六トン、一二三ミリ砲を装備し、前面装甲の厚さ一四〇ミリのスターリン2型の重戦車でした。その後を追うように、広い道路いっぱい広がったソ連歩兵部隊が行進して来ました。私と三枝君は急いで横道に入り、その隊列

の通過を見守りましたが、兵士たちの服装は戦塵にまみれ、乞食部隊のようでした。しかし小隊の半数は、一度に七十発が連射できる通称マンドリンと呼ばれる自動小銃を持ち、あと半数は倍率七、八倍という眼鏡のついた小銃を持った狙撃兵で構成されていました。

私が体験した日本軍との装備の違いの大きさに、これでは負けるのが当たり前だと思わざるを得ませんでした。

翌々日二十二日には、ソ連占領軍司令部より戒厳令が布告され、夜間五時以降の外出を一切禁止されました。その夜は一晩中自動小銃の発射音が聞こえ、強い緊迫感に包まれました。

そんな中で私は三枝君と相談して、ソ連兵が攻撃してくるようなことがあったら、私はナイフを、三枝君は斧を持って突入する覚悟を決め、その唯一の武器をストーブの炊き口に隠しました。

このような状況が何日か続きましたが、間もなく夜間の銃声も聞こえなくなり、落ち着きを取り戻してきて、昼間の外出もできるようになったある日、官舎の

前の大同大街を、武装解除された日本軍の兵士たちが、約十メートル間隔に配置された、自動小銃のマンドリンを構えたソ連兵の監視の下に、新京駅に向け移動して行くのを目にしました。夏の軍装のまま、背囊はいのうなど

わずかな身の回りの品だけを身につけた兵士たちが、言葉を発する人も無く、黙々と追われるように歩いて行きます。私たちが「何か必要なものはありませんか」と声をかけ近寄って行こうとすると、ソ連兵がマンドリンを構えて、血相変えて飛んで来る姿に慌てて逃げましたが、六列縦隊で靴音だけを響かせて去って行く姿を呆然として見送りました。自分たちも、一体これからどうなるのかという思いにとらわれました。

私たちが住んだ中村先生宅は、新京市街から二キロメートルほど南に離れた南領にある官舎で、官舎の横の空地に沿って、五十メートル巾の大同大街と呼ばれる広い道路が新京駅まで通じており、市街に至る道沿いには、こちら側に大陸科学院、向かい側に新京法大、新京工大、新京医大が並んでいました。この官舎群に

は、建大教授、大陸科学院の研究員が家族とともに住んでいましたが、隣に住んでおられた大陸科学院に勤務していた石渡夫妻から、不在の中村先生の代わりのような立場で、現在置かれてある我々の状況から、食事の作り方まで教えてもらいました。科学者であった石渡さんは、日本の現状を次のように話してくれました。「世界で初めて投下された原子爆弾は、大変な破壊力を持っていて、投下された広島・長崎は全滅状態で、たくさんの市民が死んだ。その後も、放射線による汚染で草木も生えなくなるのではないか。それに日本では冬に向かって食糧不足で、多数の餓死者がでるのではないかと言われている。このような状況になったのは、日本の政治が軍部の暴走を許してしまったことによる。中国戦線でも、日本軍は中国兵だけでなく一般の中国人まで多数殺傷して、深い怨みをもってしまっている」など、これらのことを豊富な知識でいろいろと語ってくれました。一人一人としては善良で勇敢な日本の兵士が、なぜそのような行動をとることになったのか、私は深く考えさせられることになりました。

四 ソ連兵の略奪・暴行

九月に入って間もない夜、新しく加わってきた一年下の秋葉君と三枝君、私の三人で奥の部屋で食事をしていると、玄関でゴトゴト音がするので何かと思っていると、マンドリンを構えた若いソ連兵三人が隣の部屋に入って来ました。びっくりして我々は、両手を上に挙げて恭順の意を示しました。するとソ連兵は、腕時計と万年筆を差し出すよう手振りを交えて要求してきました。三人の分を渡すと、部屋を見回していましたが、十七、八歳の男たちだけの生活を見て、おとなしく出て行きました。

このころから市内各所でソ連兵の略奪・暴行・強姦事件が頻発して、会社の女子寮が襲われたり、昼間路上で拳銃を突き付けられて暴行された話などが伝わってきました。それで女性たちは髪を切り、坊主頭になって男の衣類を身につけたりしました。各家庭ではもしもの場合に、娘たちをいかに守るかを考えたりして、防衛体制をとりました。

このひどい状況に、日本人居留民会の代表がソ連軍

司令部に抗議をしましたが、「中国戦線では、日本兵も大分略奪・強姦をしたではないか、それも日本兵はそのあと殺したりした。しかしソ連兵は殺したりはしない」と一蹴されたとのことでした。しかしソ連兵は日本人だけでなく、同盟国であるはずの中国人にも略奪・強姦を行い、中国側からの強い抗議で、やっと厳しく取締りを行うようになったとも言われています。

そのうちに治安が回復してくると、私たちが若い男の学生だけで生活しているので、年ごろも近い若いソ連兵が日本酒の一升瓶を下げてやって来て、手振り身振りの会話でソ連人の酒の飲み方や故郷の話などをしてきましたが、そんな話の中で「ドイツ兵は赤ん坊であった自分の弟を壁に投げつけて殺したりした。ドイツ兵は絶対に許せない。しかし日本兵との戦いでは、何度も突撃して来るのを自動小銃で倒したので、我々の損害は少ない。それで日本兵には恨みを持たない」と言っていました。また、日本人とよく似ている中央アジア出身のソ連兵は、大きな世界地図を広げて、ソ連をウラル山脈で分け、「西は白人の土地だが、東は同じ肌

の色をしたアジア人の土地で、君たちとは仲間だ」というような話をしていました。

五 新京に避難した開拓団の人々

突然のソ連軍の侵攻で最も悲惨な状況に置かれ、たくさんの犠牲者を出した開拓団の人たちのことは、戦後の報道や出版物で知られていますが、新京でも開拓団の人々にまつわるいろいろなことがありました。九月に入ってから時期でしたが、市内の状況を見に行つた折に、命からがら避難して来た開拓団の人々と出会いました。あちらこちらが破れて肌が見える、泥にまみれた夏の衣類を着て、髪はバラバラ、顔は正気を失つたです黒い婦人や子ども、杖をつき、背中にむしろ箆をくくりつけた老人の男など、一目見てその逃避行のいかに悲惨な状況であつたかが分かりました。そしてそれが生きていくための最低の必需品であつたのかもしれませんが。この人々は公会堂や学校、倉庫などに収容されていきました。

その後、居留民会でこれらの人々の対応にあたっておられた、元建大教授の高橋匡四郎先生のお宅に伺った折、先生はこのような話をされていました。「開拓団の人々と共に市内に居住する日本人にとつて、零下三十度にもなる冬を越すことは、燃料の確保などで大変な困難に直面することになる。たくさんの死者がでると思われるので、居留民会では地面が凍らないうちに、約二万五千からの墓穴を掘らなければと考えている」とのことでした。私もこの仕事の手伝いをお願いしますが、再発した膝関節炎のことを考えると、言いだしことができませんでした。

冬になると、先生の話のように難民収容所に発疹チブスが発生し、毎日のように荷車に何人もの死体を積んで運び出されていくようになりました。

六 国共内戦下で

新京市の治安は、ソ連軍と国府党の軍隊と警察によって維持されてきましたが、年を越して春ごろになると、ソ連軍の撤退と共に農村部を支配してきた共産八路軍が、新京への攻撃を強めてきました。

三月の終わりごろには、市内の中心部で一晩中銃の発射音が聞こえるようになりました。翌朝、私たちは満人街の商店で店の整理の仕事に雇われていたので、朝早く市内に出掛けましたが、中心部にある国府軍司令部に通じる道路を通ると、便衣の共産八路軍の兵士の死体がいくつも転がっていました。昨晚の銃声は、国府軍司令部を襲撃した共産八路軍との戦闘であったことが分かりました。新京市周辺には幾重にも警戒線が張られているのに、それをかいくぐって侵入し攻撃したわけで、その勇敢な行動に驚きました。

満人街に入ると、街角には土塁が築かれ兵士が警戒にあたっており、緊迫感が満ちています。街のはずれまで行くと、農村の方に向かって一本の道路が走っています。遠くの方まで全く人の気配がありません。その入口の所に、国府軍の将校が両手にそれぞれ拳銃を持って、仁王立ちに立っており、通行する満人たちを叱咤しています。私たちも雇い主の店に急いで行きましたが、このような状況なので帰るよう言われたものでした。

この日から幾日か経った夜のこと、擲弾筒の発射音で目が覚めました。それは裏手にある大陸科学院の国府軍の陣地からのもので、大同大街の南嶺方面に向かって、間断なく発射され、重機関銃の音もまじるようになり、寝ているどころではなく、ひたすら夜が明けるのを待っていました。

そのときには、朝鮮に南下していた中村先生の奥様と小学四年の長男を頭に、乳飲み子までの子どもたちが戻って来ていて、大家族になっていました。

やっと明るくなり、流れ弾に注意しながら窓ガラスを透かして外を見ると、近くの空地に重機関銃が据えられ、間断なく撃っています。南嶺方面を見ると、共産八路軍の兵士が一人また一人と、身を隠しながら前進して来ます。また向かい側の官舎の壁沿いには、国府軍の兵士が退却して行きました。

間もなく銃声がやみ静かになると、粗末な服を着た共産八路軍の兵士が、大同大街に次々と入って来ました。この状況を見ていて、恐怖心が一ぺんに湧いてきました。それは南満州の通化で起こった、共産八路軍

によつて百数十人の日本人が殺された通化事件のことを思い出したからです。それで畳を上げて、床下に掘られた収納庫に全員で隠れることにしました。ところが最後に私が入り、畳を下ろしたのですが隙間ができて、元のようになりません。これでは共産八路軍に見つかることになるので、私は部屋に残ることにすると、三枝君、それに秋葉君の代わりにやつてきた高沢君も出て来て、畳を下ろして元のようにして奥様たちを隠しました。

覚悟を決めて三人で座っていると、共産八路軍の兵士たちが、窓ガラスをたたいて外に出るようになっていきます。中国語が一番分かる高沢君が玄関に出て行くのと、引きずり出されたようなので、彼と運命を共にする覚悟で私と三枝君も手を挙げて出て行くと、戦闘直後で殺気立っている兵士たちが私たちをとり巻き、銃口を突き付けて武器の有無を調べました。その後、奥様も我々の身を案じて、子どもを連れて出て来てしまわれました。この棟では元住民であった人たちが市内に移住して空き家になっているところに、新京に避難

して来た開拓団の二家族が住んでいましたが、その人
たちを加えて全員が表に引き出され、南湖畔の公園に
向かって連行されることになりました。歩きながら私
は、そこで全員銃殺されると思い、どうせ殺されるな
ら、相手の一人でも倒しても思いましたが、手を出
すことはやめ、潔く死を覚悟しました。

ところが、途中まで行くと戻るように指示され、官
舎の前に戻ると指揮官らしい人物（肩章もなく服装も
兵士と同じなので区別がよく分らないが、拳銃を腰
につけているので将校と思った）から訓示があり、そ
れを日本語を話せる兵士が我々に次のように伝えまし
た。「建物を調べたが、国府軍の兵士はいないことが分
かった。それぞれ自分の住居に戻ってよろしい。もし
も武器などがあつたら必ず提出するように」とのこと
で、ほっとした私は手出しをしなくて良かったと思っ
ました。

それから共産八路軍の兵士たちは、官舎の前の空地
に集まって来て、次の市街戦に備えて休息をとってい
ましたが、だれ一人家の中に入って来る者はいません

でした。時折、水がほしいという兵士が玄関に来まし
たが、それも入口だけで中に入ることをせず、出て行
きました。

その中の一人が、流暢な日本語で「自分は朝鮮人
であるが、共産八路軍では朝鮮人民解放軍が組織され
ており、自分は延安からやって来た。日本人の元兵士
で共産八路軍に参加している者もいる。私たちは日本軍
国主義者を敵と思っているが、あなたたち一般市民は
全く敵とは思っていない。むしろ軍国主義の被害者だ
と思っている」と話し掛けてきました。粗末な服装で、
小銃ぐらいしか持っていない兵士たちが、礼儀正しく
士気が高いので、これまで共産八路軍は残虐な部隊と
して教えられていたこととの大きな違いに驚いたもの
でした。

戦闘は市の中心部に移りましたが、最後の攻防戦で
は、両軍とも重機関銃を撃っている人は日本人だと分
かりました。お互いに銃口を上に向けて撃っていたと
のことでした。両軍とも日本の敗戦後、日本軍から接
収した重機や山砲などの扱いが分からず、その操作

のため日本軍の元兵士を徴集し優遇していたようでした。

共産八路軍の統治下で、市内の治安は比較的良く保たれていました。

しかしそれも一カ月余りのことで、五月になってのある日、新京市内から共産八路軍の姿が一斉に見えなくなりました。私の官舎の空地でも、前の晩には、にぎやかに露營していた兵士と馬が、朝起きたらだれもいませんでした。全く夜中の移動には気が付きませんでした。その撤退の見事さには唖然としたものでした。そして翌日には、国府軍が入って来ましたが、この部隊はビルマ方面で日本軍と戦っていたアメリカ式装備を持った精鋭部隊で、一見して土気の高さも分かり、今までの国府軍とは格段の相違でした。

七 日本への引揚げ

国府軍の精鋭部隊が市内に入って間もなくのこと、アメリカ軍の仲立ちによる国共両軍の休戦協定が成立しました。それにより、六月から在満日本人の日本への送還が開始されることになりました。

待ちに待った引揚げが始まった新京市内では、その準備や集結地への移動で騒然となりましたが、我々の官舎にも、帰国のための新京駅出発の日時が知らされてきました。しかしその出発のためには、新京飛行場拡張工事の使役三人を出すことが条件で、この三人は工事終了後に引き揚げさせるということでしたが、工事終了といってもいつになるのか、それは保証の限りではありませんでした。

その使役を指名する紙切れが、私と三枝君の所に届けられ、もう一人は開拓団の人で、北満から新京へ逃げる途中、妻子を失った人でした。最初は何の相談もなく、一方的に指名してきた班の代表者に抗議しましたが、我々が残らなければ他の人たちは出発できないので、潔く残ることにしました。

私たち三人は班の人たちに見送られ、指定された集結地に向かい市内に入ると、それぞれの班から選ばれた人たちと一緒に、隊伍を組み行進しました。

指定された集結地に着き点呼を受けると、名前を呼ばれても返事のない未参加の人が結構いました。そこ

では、一学年下の松平君と一緒にになり、これからは三人一緒に行動を共にしようということになりました。

飛行場での宿舎は、畳も入口の扉もない廃墟に近い状態の所で、夜は蚤の襲来に悩まされ、三人で外の草の上に毛布を敷いて夏の夜空を眺めながら寝ました。

そんなとき炊事班のメンバーの希望者をつのつていたので、早速三人で応募しました。炊事の事は、朝早く起き、夜はあと片付けと明日の準備で、楽な仕事ではありませんが、昼食後から夕食の準備の間の二時間ぐらいいは、体を休める時間がとれたのです。その折に、班長から国府軍と共産八路軍との状況について、話を聞くことができました。それによると、この秋口の九月、高粱が人間の背丈ぐらいに伸びてくる時期に共産八路軍が活動を開始し、内戦が始まることは必至である。そうすると日本への送還業務が中止になり、再開の目途がつかなくなるのでは、ということでした。この話を聞いて、私はここを脱出する腹を決めて三枝君と松平君に話すと、二人共賛成だと言うので早速決行することになりました。

使役に送り出されるときに、餞別としてもらったお金を大事に持っていました。それを唯一の頼りに、午後の自由時間、それぞれ仮眠をとっているときに炊事場を後にしました。

市内には幾重にも警戒線が敷かれ、警戒線には鉄条網が張りめぐらされていて、保安隊がいる検問所もありましたが、日本人なので馬車で市内に入ることができました。街の中は日本人の帰国が進んでおり、空家が目立っていました。まだ残留していた一年先輩の佐藤善二氏を訪ねました。佐藤氏はグループで、満州時代の書籍などを整理し、中国側に引渡す仕事をやっており、それを終えて帰国する予定でしたが、私たち三人を快く迎え入れて、一緒に帰ることにしてくれました。

帰国までの間、私たちは日本人居留民会の仕事を手伝うことになりましたが、大分引き揚げたとはいえ、まだまだ日本人が残っていて、居留民会の仕事は大変な忙しさでした。そこでの私の仕事は、寄託金を預り、その預り証に毛筆で日時・住所・氏名を書くことでした。

た。中国政府の命令で、日本に持ち帰れる金は千円で、日本に出航するまでの費用を加えて五千円までは新京出発時に持参しても良いことになっており、それ以上の余分な金は、居留民会に寄託していくことになっていて、その業務をすることでした。

夜は宿舎に戻って、佐藤氏たちと起居を共にしていましたが、宿舎とは名ばかりで、略奪に遭って窓や入口の扉などは無く、板張りの粗末なものでしたが、季節が八月なので過ごせたのでした。

ところがある日、私は四十度近い高熱を出して寝込んでしまい、居留民会のお医者さんに来て診てもらおうと、肺炎とのことで、それからは高熱との闘いでした。

佐藤氏をはじめとして同宿の人たちからは、なにくれとなく心配をいただいたが、三枝君には特に世話になり、彼がいなければ私は生きて帰れなかったかもしれない。ペニシリンのような特效薬が無かったこのころは、肺炎は大変重い病気でした。大分良くなくてから、医者から「よく助かったね。君は、半分三途の川を渡りかけていたのだよ」と言われました。

ちようどそのころ、居留民会で日本人難民の救済にあたっておられた元建大教授の高橋匡四郎先生が、コレラに感染して亡くなられた知らせがありました。弔問された佐藤氏の話では、激しい下痢症状のため、先生は骨と皮ばかりのような状態であったとのことでした。ひたすら避難民救済に献身されてきた先生の死は、現実の非情さを思い知らされるものでした。

七 いよいよ引揚げ

九月に入り、私たちが新京を出発する順番がきましたが、私は大病の後の弱った身体を三枝君、松平君に助けられながら帰国することになりました。

引揚列車の車両は、側板もない無蓋車で、荷物をまんな中に集め、周りを女性や子供、外側に男性たちが座りました。それまでの話で、満人たちが熊手状のもので荷物を引っ掛け、引きずり下ろすことなどを聞いていて、夜間の停車の際には男性たちが警戒にあたりました。襲撃されそうになった車両もあったようですが、幸い実害はなかったようでした。ただ途中の駅で停車し動かなくなったときがありました。そんなときは

急遽みんなからお金を集めて機関士に渡すと、列車が動き出していました。

葫蘆島では、私たちの集団は順調に手続きを終え、一週間ぐらいの待機で引揚船のリバティー船に乗り込むことができました。

私は船底の広い船室に、病気がかりの体を横たえながら、一年半前に関釜連絡船でアメリカの潜水艦の攻撃にさらされている玄界灘を渡り、建大に入学してからの異民族との生活、そしてソ連軍の侵攻と日本の敗北、その後の敗戦国民として過ごした一年有余の激動の中での生活を、走馬灯のように次々と思い起こしていました。

いよいよ日本の陸地が見えてくると、乗船している日本人のほとんどが甲板に上がり、近づいてくる日本の国土を万感の思いで見守りました。

雲一つない青空に輝く太陽の下、透き通った紺青の海、そして緑に覆われた島々、なんと日本は美しい国土を持った国かと思いました。

しかし、同期生田中和夫君が書いた「断腸記」と題

する手記の冒頭には、次のような文章があります。「上陸前夜、不幸な出来事が発生。三人の女性の投身自殺。

主人は現地召集でシベリアへ。新京までの逃避行三カ月、幼児は飢えで死に、またはかろうじて満人にもらわれ、着たきりすずめでたどり着いたのであった。小学校の講堂の板の間にアンペラを敷いての生活は、言語に絶するものであったろう。女一人生きることの難しさ。私の苦力時代、しばしば見かけたのはチェンピクイリーン屋（煎餅屋）で拾われ、数人の満人男性の共有者となり生きぬいた人。国民党、共産八路軍相手に俄造りの慰安婦小屋で働くなど、『せめて一目内地の山を見てから……』という引揚げにまつわる悲しい思い出である」

海外日本人の唯一の生きる希望であった日本への上陸を目の前にしながら、この女性たちはどんな思いで身を投げたのであろうかと思うのである。

やっと日本に帰って来た喜びと悲惨な出来事が交差して、感慨無量なものがありました。

八 引揚げ後の生活

日本に引き揚げて来た建大関係者のうち、終戦前に建大を卒業していた一、二期生は、公職追放令によって一切の公職に就くことを禁止されました。私たち七、八期生は一般の海外引揚げ学徒として、国公立の高等専などに編入試験を受けることができ、合格すれば入学が許されました。私は、旧制水戸高等学校に入学しましたが、実家が東京大空襲で焼け出されていたので、学費を免除してもらい、アルバイトなどをしながら卒業しました。

社会に出てからは、教育図書教材を出版する会社に就職しましたが、四十二歳のときに独立して出版物の分野が異なる教育図書教材を製作・販売する出版社を設立し、代表取締役になり、それから五十数年間働いて七十四歳で会社を解散して、年金生活に入りました。その間、公職追放令が解除されたころから、建大元教授や、一、二、三期生などが中心となって「建国大学同窓会」が組織され、私たち七、八期生も参加して、全国総会が毎年開催されるようになりました。

日本と中国との国交回復後は、各期あるいは個人による中国の同窓との交流も盛んに行われるようになり、あるいは同窓会を結集しての訪中・訪韓の行事も行われました。しかし、中国の文化大革命の際には、「偽滿建国大学」として扱われ、中国の同窓たちは厳しい迫害を受け、自殺をする人まででたそうです。

私は、建大同窓会の幹事として、七期生の会誌を二十年以上にわたって編集・発行したり、他の期の文集などの制作にもあたりました。また、日本の同窓のものだけでなく、中国同窓の「建大回想文集」の日訳本、さらには台湾同窓の日訳本なども制作しました。そのほか、建大に在学していた各民族との交流は、日本の建大同窓会が中心となって在日同窓の子女を招待しての行事や、日本留学の身元引受け、就学資金の援助など多方面にわたる活動をしています。

現在、日本と中国、日本と韓国の国家間には難しい問題が山積し、友好関係を築くにはほど遠い感がある中で、建大同窓の間に培われた信頼と友情の絆は、アジアの平和、ひいては世界平和にも大変に価値あるも

のではないかと思うものです。